

第七章 お茶をしに家へ

「法廷内では静粛に！」と王が叫びます。
「そなたたちに対する重要な規則がある」
皆は静まり返り、王を見ます。
王は本を開き、読み上げます、「規則 42 条。1 マイルの背丈より高い者は皆、法廷から退出せねばならぬ」
皆がアリスを見ます。
「私は 1 マイルの背丈もないわよ」とアリスが言います。
「いや、ある！」と王が言います。
「お前は 2 マイルより高いぞ」と女王が言います。
「私は法廷から出て行きたくないわ」とアリスは言います。
「それは本当の規則じゃないもの」
「それはとっても古い規則なのだ」と王が言います。
「それじゃあなぜ規則 42 条で、規則 1 条じゃないのかしら？」とアリスが尋ねます。
王は何と言っているかわからず、いそいそとその本を閉じます。
白ウサギが飛び上がり、「見て下さい、手紙があります！」と言います。
白ウサギは眼鏡を掛け、手紙を見ます。
「おや！ 手紙ではありません、詩です」と彼は言います。
「それを始めから読み、そして終わりで止めるのだ」と王が言います。
白ウサギはその詩を読みますが、誰もそれを理解しません。
「この詩はばかげているわ」とアリスが言います。
「おお、ジャックの頭を切ってしまえ！」と女王が言います。
「何てばかばかしいことを！」とアリスは大声を出します。
アリスはとてとても大きくなっているの、今やもう誰も恐れていません。
「静かにしろ！」と女王が叫びます。
「嫌よ！」とアリスが叫びます。
女王はひどく怒り、顔が紫色になっています。
「彼女の頭を切り落とせ！」と女王が怒鳴ります。
「あなたたちのことなんか怖くないわ」とアリスは言います。
「あなたたちはただのトランプだもの！」
すると突然トランプたちが宙に舞い上がり、彼女の上に降りかかってきます。
「あら、まあ！」とアリスは言います。
アリスは顔からトランプたちを払いのけます。
アリスは目を覚まします。
そのトランプたちは木の葉なのです！
アリスのお姉さんはアリスの顔からそれらを払いのけます。
「起きて、アリスちゃん！」とアリスのお姉さんが言います。
「まあ、何て変な夢なのかしら！」とアリスが言います。
「私にそれについて教えてちょうだい」とお姉さんは言います。
アリスはその夢についてお姉さんに話します。
お姉さんは聞いて、笑います。
「そうね」とお姉さんは言います、「とっても変わった夢ね。でももう遅いわ、それにお茶の時間よ」

アリスは家にかけて行き、そして白ウサギ、イモムシ、公爵夫人、帽子屋、チェシャ猫、クローケーの試合、女王、王、そしてトランプたちのことを思います。

「何てすてきな夢なのでしょう！」とアリスはうれしそうに言います。

「いつの日かそれについて、私の子供たちに話してあげられるわ」